



Title	シレティ語のアイデンティティ：ベンガル語の方言か？
Author(s)	北田, 信
Citation	言語文化研究. 2021, 47, p. 241-258
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シレティ語のアイデンティティ： ベンガル語の方言か？

北 田 信

The identity of Sylheti language: Is it a dialect of Bengali?

KITADA Makoto

Although Sylheti language, spoken in the northeastern part of Bangladesh, is considered a dialect of Bengali, its distinctiveness is so conspicuous that speakers of standard Bengali cannot easily understand Sylheti. In addition, it has its own alphabet, Sylheti Nagri, which has a quite long literary tradition of several centuries but is now obsolete in use. 95 percent of the immigrants of Bangladeshi origin in the United Kingdom are said to be Sylhetis, i.e. Sylheti-speaking people. Since the 70s, movements to promote Sylheti language and to revive Sylheti Nagri began among Sylheti people settled in the UK. Probably in concert with these movements abroad, cultural awareness about Sylheti language and Sylheti alphabet seems to be also gradually raised in Sylhet area of Bangladesh since around 2018. This article analyzes Sylheti people's identity currently in the making, comparing the movements in the UK and those in Sylhet.

キーワード：バングラデシュ 移民 方言

注記 本稿における原語のローマ字転写について

本稿では、ベンガル文字をローマ字転写する際に、原語の文字綴りを忠実に反映させる方法を探る。新期インド・アールア諸語における潜在母音の消失については、語末を除いてダッシュ「'」で表記する。

1. シレティ語 (Sileṭi/Sylheti language) は、ベンガル語の一方言とみなされ、バングラデシュ東北縁部に位置するシレト¹⁾管区 (Sileṭ Bibhāg/Sylhet Division) を中心に、周辺の諸地域たとえばインド・アッサム州のボラク Barāk 盆地 (Barak Valley) やホジャイ県 (Hojai district) およびインド・トリプラ州北部で話される。またイギリス、アメリカ合衆国、中東諸国などに

1) カタカナ表記ではシレット、シレートと書かれることが多いのだが、本稿では、言語名シレティとの関連上、シレットと表記することにする。

も多くの移民話者がいる²⁾。シレティ語は、中央からの距離的隔たりのため標準ベンガル語からは音韻・語彙・文法の全ての点で著しい差異があり、標準ベンガル語しか知らないものにとり、シレティ語を耳で聴いて理解することは難しい、と言われる。1970年代からイギリスのシレティ系移民の間で、シレティ語を自立的な言語として認知しようという動きが興ってきた。近年、同様の動きがバングラデシュ・シレト地方においても見られる。本稿は、シレティ語をめぐる内外のこれらの動きを分析し、現在まさに形成の過程にある新しい言語意識・アイデンティティについて考察しようとするものである³⁾。

シレティ語は、ベンガル文字では সিলেটি Sileṭi と記される。英語の綴り Sylheti は英領植民地時代の古い綴りを踏襲している。ただし、シレティ語話者は、সিলি Siloṭi⁴⁾と呼んでいるようである⁵⁾。

当然のことながらベンガル語にはシレティ語だけでなく多くの方言が存在するが、それらの様々な方言群からシレティ語を特異化する一つの事柄がある。シレティ語は、独自の文字を持つのだ。シレティ・ナーガリー (Sylheti Nagri, Sileṭi Nāg'ri)⁶⁾と呼ばれるこの独自の文字は、インド系文字(ブラフミー文字を起源とする文字)の系統に属するものの、ベンガル文字とは明らかに別のものである⁷⁾。この文字の歴史は古く、15世紀に作られ、シレティ語は元来この文字によって記されてきたという。

2. 現在、バングラデシュの他の地域と同様に、シレト地方⁸⁾においても書き言葉としては標準ベンガル語が用いられるが、日常生活の場において会話で用いられるのは主にシレティ方言だという⁹⁾。しかし今日、シレティ語は文字で記されることは少なく、記される場合でもベンガル文字を使うのが普通である。そもそも、学校教育ではベンガル文字しか教えないので、シ

2) Wikipedia 'Sylheti language' の項(閲覧2020年8月31日)による。周知のとおり、Wikipediaは誰もが執筆・加筆でき、時折、誤った記述が散見されるが、本稿で扱うような、南アジア地域の微細な事項に関する大まかな情報を得るには便利な参照ツールである。その欠点について知ったうえで、慎重に用いることは、許されるであろう。

3) シレティ語の調査にあたっては、フランス国立東洋言語研究院のベンガル語講師 Hassan Khan 氏に協力いただいた。ここに謝意を表す。Je tiens à exprimer toute ma reconnaissance cordiale à M. Hassan Khan (INALCO, Paris) pour sa précieuse collaboration.

4) ベンガル文字の転写法では chilati となるが、ここではシレティ語の実際の発音に依った。

5) 標準ベンガル語には7つの母音 (a, i, u, e, ε, o, ə) があるのに対して、Plettner [2007: 4] および Chalmers [1996: 12] によれば、シレティ語には5つの母音 (a, i, u, e, o) しかない。ただし o の発音は、Wikipedia 'Sylheti language' によると、広い円唇母音 [ɔ] だという。ただ、一つの単語の中に含まれる i や y が、前の母音に影響を及ぼす現象、つまり標準ベンガル語で一般的に「母音調和」と呼ばれる現象に似たものは、シレティ語にも見られるから、実際に現れる音としては、様々なヴァリエーションが生じるのかもしれない。しかしこれらの音声的ヴァリエーションが意味の区別には関しない、ということなのかもしれない。

6) 実際の発音をカタカナで表記すると「シレティ・ナグリ」になるが、本稿では、サンスクリット語やヒンディー語などを表記する際に用いられる「ナーガリー文字」「デーヴァナーガリー文字」などの文字名称(のカタカナ表記)を参考にして、「シレティ・ナーガリー文字」と呼ぶことにする。

7) Wikipedia 'Sylheti Nagri' の項を参照せよ。

8) 土地名としての「シレト」は、文脈によって都市名としてのシレト、行政区域としてのシレト管区 (Sylhet Division) さらに漠然と、歴史的な地域名としてのシレト地方などを表す。

9) シレト出身のインフォーマントによる。町中のバーザールはおろか、モスクなどでの宗教的な説法や学校の教師までもが、日常的会話ではシレティ語を用いる、という。

レティ・ナーガリー文字を読める者は少ない。

3. この地方でシレティ・ナーガリー文字が作られた背景には、この地方には歴史的にムスリムの人口が多く、その人たちにとって容易に学びやすい文字が必要とされた、ということがあるらしい。標準ベンガル語のベンガル文字表記においては、サンスクリット語由来の歴史的表記が踏襲され、表記と実際の発音との間に大きな隔たりがあるが、シレティ語をシレティ・ナーガリー文字で表記する際には、発音通りの表記が採用された。言文一致の分かりやすい表記法を用いて、数百年間、宗教的賛歌集を中心として、イスラーム布教を目的とするさまざまなテキストが記され、流布してきた。

サンスクリット語彙を多く含む標準ベンガル語に比べ、シレティ語にはアラビア・ペルシア語彙が多く含まれ、シレティ語が、14世紀の聖者シャー・ジャラルによるシレト征服以来この地域に移住してきたムスリム系入植者と、それ以前から現地に暮らす人々との間のリング・フランカとして発達してきたことを示唆する¹⁰⁾。シレト管区 (Sylhet Division) の首都シレトには、聖者シャー・ジャラル Šāh Jalāl (Šah Jalāl) の廟があり、スーフィズムの一中心としての役割を担ってきた。シレト語話者コミュニティのアイデンティティは、この地方の宗教的なアイデンティティと重なって形成されてきたようである。

英語版 Wikipedia の List of works written in Sylheti Nagri の項¹¹⁾ には、1500年代から1900年代 (20世紀後半の作品を除く) までのシレティ・ナーガリー文字で書かれた作品がリストアップされている。さらに多くの作品の写本はデジタル化されてオンラインで閲覧できるようになっている¹²⁾。

4. 今日イギリスに暮らすバングラデシュ系移民は主にシレティ語話者であるという¹³⁾。シレト地方の丘陵地帯には紅茶プランテーションが多く存在し、茶葉は河川および鉄道によって海岸部へ運ばれ、さらにヨーロッパへと送られた。この、シレトと欧州を結ぶ交易ルートを通して、シレティ出身者がベンガル地方ではいち早く欧州に進出したようである¹⁴⁾。確かに、ロンド

10) とはいえ標準ベンガル語は、英領インド時代に帝都コルカタを拠点として、ヒンドゥーの知識人が中心となって書き言葉として確立した言語だから、ここで私が標準ベンガル語をシレティ語と対比したのは、多分に単純化した説明であり、実際には精査を要するであろう。ただし代表的 (とされる) 中世ベンガル文学テキストを見る限りでは、アラビア・ペルシア語彙はそれほど多くない印象がある。とはいえベンガル語をアラビア文字で表記した写本も大量に存在し、それらの研究はあまり進んでいない。ベンガル語話者であっても、ムスリムでアラビア・ペルシア語の素養のあるものは進んでアラビア・ペルシア語彙を使用したであろうことは容易に想像でき、実際にはそれぞれのコミュニティに独自の様々な質のベンガル語の在り方が存在したのである。シレティ語は、そういった異なる在り方を垣間見せてくれる、という点で興味深い。

11) https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_works_written_in_Sylheti_Nagri (閲覧2020/09/06)

12) これらの写本は、British Library の Endangered Archives Programme というサイトで公開されている。例えば、Golām Huchan が1549 CE に著した Tālib Huchan (<https://eap.bl.uk/archive-file/EAP071-5-3>) (閲覧2020/09/06)。

13) Plettner [2007: 4] および日本語版 Wikipedia 「シレト語」の項によると、イギリスに住むバングラデシュ系移民の95%はシレティ語話者である。

14) Plettner [2007: 4] によれば、今日のイギリスのバングラデシュ人コミュニティは主に1950年代から60年代にかけて

ンの南アジア移民が集まる地区 Brick Lane にはベンガル語話者が多いが、彼らの話すのは標準ベンガル語ではなくシレティ語なのである。1970～80年代になると、イギリスに暮らすシレティ語話者の中から、シレティ語を独立した言語であると認めよう、という運動が起こってくる¹⁵⁾。

イギリスの代表的なアジア・アフリカの諸言語の研究機関ロンドン大学 SOAS には Sylheti Project というプロジェクトがあり、Sylheti 語の授業が開講されている。このプロジェクトのホームページ¹⁶⁾を見る限り、かなり充実した授業内容である。SOAS では、もともとあった常設学科としてのベンガル語科は廃止されてしまったから¹⁷⁾、当事者の自己認識が、「ベンガル語の方言話者」から「シレティ語話者」に移り変わりつつあることを示す一つの象徴的事象であるといえる。同プロジェクトのサイトからは、シレティ語を学ぶための教科書や易しい読み物など教材が無料ダウンロードできるようになっている。

また、これとは別に、ロンドンを拠点として Sylhet Translation And Research という団体が設立されている¹⁸⁾。HP によると¹⁹⁾、1990年代にバングラデシュ人の作家・ジャーナリスト Matiar Chowdhury 氏とイギリス人言語学者 James & Sue Lloyd-Williams 夫妻が設立した団体で、シレティ・ナーガリー文字の普及に努めているという。HP にはいくつかの出版物が紹介されている。ロンドンの南アジア系移民が集まる地区 Brick Lane の Fashion Street には、Shantir Boi Library (Śāntir Bai) 「平安の本」というキリスト教系の書店があり、昨年私が訪れた際には、標準ベンガル語やシレティ語の出版物も少数ながら販売されていた。その時入手した書籍を中心として、下にシレティ語による出版物を紹介する。

ベンガル語諸方言については非常に豊富な先行研究があり、シレティ語については例えば『シレト歌謡集』[Badiujjāmān 1968]、『Śrīhaṭṭa の民俗音楽』[Datta/Bhaumik 1966] など、民謡や口承テキストを集めたものがある。また『民俗文学』[Loka-sāhitya 3, 5, 13, 15]²⁰⁾は、バングラデシュの様々なベンガル語方言による民謡・口承テキストをテーマ別・ジャンル別に刊行したシリーズであるが、その中にシレト地方が含まれている。しかしこれらは言語学・民族学的な専門研究・研究資料として作成されたものである。

専門家に向けてではなく、英語の読める一般的な読者を対象にした実用的なシレティ語入門書としては Syloti Grammer [Plettner 2007] (全48頁)、Learning Sylheti [Chalmers 1996]²¹⁾ (全73

形成されたが、その発端は、二つの世界大戦の時に多くのシレティ人 (Siletis) が船員として働いていたことにあるという。最大のバングラデシュ人コミュニティはロンドンの東のはずれ Tower Hamlets だという [Plettner 2007: 5]。

15) 英語版 Wikipedia ‘Sylheti language’ の項による。

16) <https://sylhetiproject.wordpress.com/soas-sylheti-project/> (閲覧2020年9月16日)

17) ただしベンガル語の授業は開講されており、ベンガル語を学ぶことはできる。

18) 出版物には 305 Cambridge Heath Road という住所が記載されている。

19) <http://www.sylheti.org.uk/>

20) 本稿末尾の文献表では、各巻の編集者名によってではなく、共通のシリーズ名を項目として立て、まとめて記載した。

21) 出版年については不明点がある。本稿末尾の文献表における同書についての脚注を参照されたい。

頁)という小冊子が発行されている。前者 [Plettner 2004] はバングラデシュ国シレトで発行されたもので、シレティ語の基本文法を簡潔ながら比較的網羅的に記述したものである。シレティ語の例文や語形はベンガル文字とローマ字表記の両方で表記されている²²⁾。シレティ語をベンガル文字で表記する際には標準ベンガル語の正書法を可能な範囲で保持する努力がなされるので、標準ベンガル語とベンガル文字の知識がある者にとり、ベンガル文字で表記されたシレティ語を読んで或る程度理解することが可能である。これに対し、シレティ語の発音は標準ベンガル語から著しく乖離するので、ローマ字による発音の表記は有用である。また、ローマ字が併記されているおかげでベンガル文字の知識の全くない者が、この本を用いてシレティ語を一から学習することも可能である。

後者 [Chalmers 1996] はロンドンで出版されたもので、シレティ語はローマ字のみで表記されている。前半は簡単な文法のスケッチ、そして後半は会話に使えて便利な例文集である。同書4頁には、「イギリスとバングラデシュのシレティ語話者を念頭に置いている」とあるが、読者としてはおそらく主にイギリスに住む移民系二世・三世で、もはや標準ベンガル語とベンガル文字の教育を受けていない層を対象とし、ローマ字のみで学べるような簡易的なマニュアルとして書かれたのだろう。

両者 [Plettner 2007; Chalmers 1996] とともに非常に薄く、ごく簡便な体裁のものであるが、シレティ語は膠着語的な性格が強く複雑な語形変化を持たないので、語学教科書として十分使えるものとなっている。標準ベンガル語の場合、文法変化はやはり単純で多くはないものの、そこに母音調和²³⁾と呼ばれる特殊な現象が絡んでくるので、文法解説はややこしくならざるをえない。これに対しシレティ語には母音調和が存在しないから²⁴⁾、この程度の頁数に基本文法を不足なく盛り込むことが可能なのだろう²⁵⁾。

Shantir Boi 書店では、Sylheti Translation And Research 発行の、シレティ・ナーガリー文字の練習帳 A Sylheti Alphabet Book/Siloṭi Nag'ri Horof/Sileṭi Nāg'ri Barṇamālā²⁶⁾ (2006) および

22) 同書冒頭 [Plettner 2007: 1] では、Syloti Phonetics and Writing System と題して、シレティ語を表記する方法として、まずシレティ・ナーガリー文字を挙げ、それがベンガル文字よりも遥かに簡便で学ぶのが容易であること、ベンガル文字ともヒンディー語のデーヴァナーガリー文字とも異なる文字であること、古い伝統を持ち、一説によれば1303年にシレトを征服した聖者シャー・ジャラルに付き従う者達もたらしたと言われること、250年もの文献伝統を持つこと、などを述べる。同書3頁にはシレティ・ナーガリー文字の一覧表がその音価とともに記載されている。ただし、この文字は現在では使われなくなってしまい、古い文献を解説できる者もほとんどいなくなってしまっているもので、同書ではベンガル文字とローマ字の表記を採用せざるを得なくなった、と釈明している。同書の表紙には英語書名の上にシレティ・ナーガリー文字で Siloti 「シレティ語」と表記されている。つまり、シレティ語とそれを話すコミュニティの独自性を示す象徴として、シレティ・ナーガリー文字が掲げられはするけれども、その実用性はあまりないという実情を反映しているのであろう。

23) 慣習的に母音調和と呼ばれるが、トルコ語などのそれとは異なり、単語の後方に位置する高舌母音 (i, u) が漸次的に前方の母音/母音群に影響を及ぼし高舌化していく、という現象であるから、本来は、「前方向漸次的高舌化」とでも呼んだほうが適当であろう。

24) ただし、母音 i が、前の音節に影響を及ぼす現象自体は見られる。例 シレティ xoira (標準ベンガル語 करिया kariyā [koria])

25) 英語版 Wikipedia ‘Sylheti’ の項によれば、シレティ語には高低アクセントがあるとされるが、両者 [Plettner 2007; Chalmers 1996] とともに全く触れていない。シレティ語の高低アクセントについては Gope/Mahanta [2014] が詳しい。

26) タイトルは、英語、シレティ・ナーガリー文字によるシレティ語、ベンガル文字による標準ベンガル語の三言語併記

Learning to Read and Write Sylheti/Siloṭi Lekha ar Poḍā/Chilaṭi Lekhā ār Paḍā²⁷⁾ (2006) も入手できた²⁸⁾。両者ともに児童を対象としており、動物、野菜、果物などのイラストが描かれて、親しみやすいものとなっている。

この団体 Sylheti Translation And Research の設立者 James Lloyd-Williams, Matiar Rahman Chowdhury は、Ten Sylheti Poems/Dos'tā Siloṭi Kobita/Da's'tā Chilaṭi Kabitā²⁹⁾ [Lloyd-Williams/Chowdhury 2006] というシレティ語から英語への訳詩集を出している。19世紀から20世紀前半にかけてのシレティ語のスーフィー神秘主義詩人たち³⁰⁾の詩の原文がシレティ・ナーガリー文字とベンガル文字両方の表記で記載され、英訳されている。この団体のHPによれば、この団体の目的はシレティ語とシレティ・ナーガリー文字の出版・普及に努めていくこと、とあるが、私が見るかぎり現時点ではシレティ語による現代的な出版物が充実しているとは言いにくく、また、それを受容する読者層が育っているともいいにくい。現時点では、一部の篤志家による象徴的な活動以上の域を出ないのではないか。

シレティ語あるいはシレティ語話者について実際の活動をしているのは、むしろ Channel S という、イギリス（およびヨーロッパ）に住むシレティ系移民を対象としたオンライン・テレビチャンネルのほうであろう³¹⁾。その看板番組的な位置にあるニュース対談番組 Reality with Mahee はシレティ語で行われる。（しかし他の番組は、標準ベンガル語あるいは英語で行われているようである。）この Reality with Mahee には、毎回数人の対談者が招かれるが、番組で扱うトピックにもよるであろうが、英国の経済界で活躍しているバングラデシュ移民系の実業家が目を惹く。司会の Mahee 氏は英語を交えつつもっぱらシレティ語で話すが、その他の出演者は標準ベンガル語を話しており、シレティ系なのか、バングラデシュの他の系統なのか、を判断することは難しい。いずれにせよ、音声データや動画などの、文字を介在させないメディアならば、第一世代とそれ以降の世代の区別なく楽しむことができる。ネットが発達・普及した今日ならではの利点であろう。歌謡番組も豊富で、言語の一般的な普及という点では、学術的なものよりも、こうした娯楽的なもののほうが力があるかもしれない。

1990年代、2000年代から、従来「地方語」としての地位に甘んじてきた言語が、自立的な独

である。ちなみにシレティ語で「文字」を意味する語 horof はアラビア語 harf に由来する。これに対し標準ベンガル語 barṇamālā はサンスクリット語彙である。

27) 英語タイトルと並んで、シレティ語タイトルがシレティ・ナーガリー文字とベンガル文字の両方で表記される。（ローマ字転写においてはそれぞれの文字に対応させたので異なっているが、実際のシレティ語発音は同じである。）

28) 両者とも著者名は記されず、Sylheti Translation And Research 発行となっているので、ここに書名・出版年とともに記載し、文献表からは省略する。

29) 英語タイトルと並んで同一のタイトルがシレティ・ナーガリー文字とベンガル文字の両方で表記される。シレティ語と標準ベンガル語は、ほぼ同じ表現になっている。

30) 詩人名は次の通り（シレティ・ナーガリー文字とベンガル文字を併記する）Hason Raja (Hāchan Rājā 1854-1922), Sufi Sitaloṇ (Suphī Śītālāṇ 1806-1899), Soiod Sah'nur (Saiyad Śāh'nūr 1730-1855), Soiod Ab'dunur Huseni Cisti (1845-1918), Hafij Hatim Coudhuri (Hāphij Hātīm 1855-1925), Sah Achod Ali Pir (Śāh Achad Āli Pīr 1843-1922), Śāh Ar'kum (Śāh Ār'kum 1877-1941), Sekh Bhānu (Śekh Bhānu 1859-1919)

31) <https://chsuk.tv/>（閲覧2020/09/17）

立言語としての認知を獲得する、あるいは要求する、という動きが世界的に盛んになってきた³²⁾。21世紀になって、diversityを肯定的に評価し、minorityを認知しようという意識の変化が起こって来、それはネットの普及によって少数者が格段に意見発信をしやすくなってきたという背景と連動しているが、シレティ語についての状況も、それに呼応するものであろう。

ただし、これらの動きが、英国で暮らすシレティ系のバングラデシュ移民の大半の言語生活に、はたしてどれだけのインパクトを持ちうるかについては、未知数と言わざるを得ない。シレト出身であっても、バングラデシュ本国で学校教育を受けた経験をもつ移民第一世代にとって、読み書きの際に用いるのは標準ベンガル語であり、たとえ話し言葉がシレティ語であっても、活字化されたシレティ語を読むのは難儀なのではないか。他方、英国で生まれ育った移民第二世代、第三世代になると、家庭での話し言葉としてはシレティ語を用い、外では英語を用いるので、標準ベンガル語とベンガル文字の読み書きの知識は欠落しているのが普通である。その場合、ラジオやテレビなど、文字を介さないで観たり聴いたりできるメディアの受容度は悪くないかもしれない。しかし、出版物を読む段になると、今のところ、シレティ語の状況はあまり充実していないと言わざるを得ない。日常的に英語で生活する第二、第三世代にとり、シレティ語や標準ベンガル語の知識は、自分のルーツとなる南アジア地域（バングラデシュ）との繋がりを維持しようと意識的に努力しない限りは、不必要なものである。そしてもし、自分の文化的ルーツを見失わないようにしようと本人が望む場合、出版物が遥かに豊富な標準ベンガル語を選んだほうが、よほど得なのではないか。

上記の二団体 Sylheti Project, Sylheti Translation And Research とともに、ベンガル文字よりもシレティ・ナーガリー文字の普及を目指しているようであるが、上に述べたような状況があるので、象徴的な意味合い以上の、実際的な意義はあまり感じられない。ただし、或るコミュニティが、自らのアイデンティティを発見し、それを内外に発信していこうとする際の決め手として重視されなくてはならないのは、当事者達の意識であって、そのツールが利便性に適ったものであるかどうかという点は、二の次であろう。ベンガル文字を用いてシレティ語を表記することは可能であり、実際に近現代のシレティ語の出版物はもっぱらベンガル文字を用いて表記されているのにもかかわらず、この二つの団体のように、わざわざシレティ・ナーガリー文字で表記することを推進するのは、まさにシレティ・ナーガリー文字がベンガル文字とは全く違った形を持つからこそなのだろう。彼らにとって、ベンガル文字を知っていても、シレティ・ナーガリー文字を読むことができない、という不便さは、シレティ語がベンガル語からは独立した言語であることを明確に示す、ひとつの便利なしるしなのである。つまり、ここでは文字の相違が、言語の相違にすり替わっている。

32) 例えば、ルクセンブルク語の促進政策については小川 [2019] および Descamps/Monthéard [2020] を参照せよ。この傾向はインドでも見られ、近年、従来ヒンディー語の東部方言とされてきたミティラー語 (Maithili) や Bhojpuri 語によるラジオ・チャンネルが設立されるなどの変化があった。

シレティ語とシレティ・ナーガリー文字の認知をめぐる動きに関して興味深いのは、上に見たように、これが、本土バングラデシュを遠く離れたイギリスで起こっている出来事だという点である。バングラデシュを離れたことにより、「ベンガル人」という大きなアイデンティティの拘束力が弱まった。その代わりに、「シレト地方出身者」「シレティ語話者」という下位のアイデンティティが前面に現れてきた。上記のように、イギリスのバングラデシュ移民系のマジョリティは、シレティ系³³⁾だからである。その際、アイデンティティを輪郭づける主要因はシレティ語という「言語」である。バングラデシュから遠く離れているおかげで、「バングラデシュ」というアイデンティティから「シレティ系」「シレティ語話者」というアイデンティティを分離することが容易になった。

5. この「シレティ語話者」というアイデンティティの隆興は、しかしイギリスだけでなく、本土バングラデシュにおいても見られるようである。バングラデシュ国内では、「バングラデシュ」という大きなアイデンティティの拘束力が、当然のことながら強まるので、「シレティ語話者」という小さなアイデンティティの発現の仕方は、イギリスにおけるそれとは違って、もう少し複雑なものとなるであろう。バングラデシュの書籍ネット注文サイト Rokomari.com で、Sileṭi あるいは Siloṭi でキーワード検索をかけると、シレティ語・文学の歴史やシレティ・ナーガリー文字の歴史に関する書籍が幾つか引っかかってくる。当初、私はこれらの複数の書籍を取り寄せて分析することを予定していたが、コロナ禍のせいで同サイトの海外発送サービスが中断されてしまい、断念せざるを得なくなった。現在2020年9月初めの時点では、同サイトの海外発送先として選択できるのは、イギリス、アラブ首長国など数か国に留まっている。

仕方がないので、本稿では、バングラデシュで出版された、シレティ・ナーガリー文字についての一冊の書籍『シレティ・ナーガリー文字の易しい読み物』Selīm, Mostaphā 2018: *Sileṭi nāg'rīlipir sahaṭ'pāṭh*. Sileṭ: Śrīhaṭṭa Prakāś [Selīm 2018]³⁴⁾を対象にして、バングラデシュ国におけるシレティ語話者のアイデンティティをめぐる意識を分析することにする。たとえ一個のサンプルであっても、その背後には、それが属する社会全体の意識あるいはパラダイムが前提としてあるはずだから、一見、個別の現われのように見える現象から、それが意識的にあるいは無意識的に踏まえる認識的枠組みを観察することができるだろうと考える。もちろん、サンプルは多いほうが良いに越したことはないのですが、早期の航空便再開を切に願うばかりである。

33) 本論考では、「シレティ系」を「シレティ語話者」および「外国に移住したシレティ語話者の子孫」という意味で用いる。これを、出身地域名によって「シレト系」と呼んでもいいかもしれないが、シレティ語の使用域と、いわゆる「シレト地方」や「シレト管区」とはずれがあるので、正確さに欠く。また、一連の様相を見る限り、この動きは地域に根差すというよりも、「シレティ語」という言語に根拠を置いている。

34) 記述言語は標準ベンガル語である。

6. 著者 Selīm は次のように記す [Selīm 2018: 8f]。

「バングラデシュの出版界で、2001年よりも前に、プロフェッショナルな形でシレティ [系]³⁵⁾の出版社が存在していたかどうか、定かではない。私が出版社 Utsa Prakāśan を創立したのは2001年である。この後、首都ダカで、ほかにも何人かのシレティ [系の人々] がこの業種に参入した。様々な経緯により、二、三人を除いて、今はもう誰もこの業種に残っていない。とはいえ、[シレト] 管区の首都 (bibhāgīya śahar) シレトでは、これと逆の様相が見られる。過去数年間に、十数人もの人々が出版業に参入してきた。」

この一節から窺い知れるのは、この本 [Selīm 2018] が出版された2018年までの数年間に、シレトを拠点として出版業界が活気づいてきたことであるが、それがどのような社会状況を起因としているかまでは残念ながら言及されていない。例えば日本では、近年のインターネット及びスマホの普及により出版業界が未曾有の苦境に立たされていることを考えると、意外である³⁶⁾。何らかの理由により、シレトにおいて読書に対する意欲が高まっている、ということであろう³⁷⁾。

さて、全88頁という小さな分量の、文字についての入門書と銘打った本書は、実際にはシレティ語とシレティ語による文芸の歴史を紹介したものとなっている。著者 Selīm は、文字の重要性を次のように説く。

世界には様々な民族 (nṛgoṣṭhi) がおり、それぞれ独自の言語を持っているが、独自の文字を持っている例は少ない。バングラデシュには様々な民族がいるが、独自の文字を有する民族は、[ベンガル人以外には] チャクマ Cākmā とマニプリ Maṇipuri のみである³⁸⁾。[Selīm 2018: 30] これに対し、一つの言語が二つの文字を有する稀有な例がベンガル語である。ベンガル語は、10世紀末から1000年のあいだ使われてきたベンガル文字を有する。しかし、これと並んでシレティ・ナーガリー文字というもう一つの文字を持つ。[Selīm 2018: 30]

ここでは、シレティ・ナーガリー文字は、シレティ語に限定されず、大きなカテゴリーであるベンガル語を表記するために用いられる（用いられ得る）文字、と捉えられている。つまり、著者 Selīm にとって、シレティ語を他の数多くのベンガル語方言から区別するのは、シレティ

35) 原文には sileti とあるが、つまり、シレト出身者のシレティ語話者が設立した出版社であり、その出版物がシレティ語が標準ベンガル語のどちらかで書かれていたか、については特定しない。おそらく、標準ベンガル語によるものがほとんどであったと考えられる。

36) これに関連して思い出されるのは、2014年にインドの新聞事情を報じた日経リサーチ記事「新聞王国、インド」である (https://gmc.nikkei-r.co.jp/features/overseas_detail/id=579 閲覧2020/09/06)。この記事によると、インドではコンピュータの普及が立ち遅れているため、紙媒体の新聞の売れ行きは悪くない、という。ただし2014年から現在2020年までの間に、インドをはじめとする南アジア地域でもスマホの普及はめまぐるしいから、状況にはさらなる変化があるかもしれない。

37) ここで再び思い出されるのは、昨今のネパールの文壇である。Narayan Wagle のネパール語小説 Palpasa Cafe (2005出版) が2012年に国民的文学賞 Madan Puraskār を受賞してベストセラーになって以来、若手作家による優れた作品が次々と現れ、盛況と言ってよい。ネパールでは英語教育がかなり普及しているにもかかわらず、文学鑑賞となると、質の高いものを英語ではなく母語で読みたい、という気持ちがあるのだろう。

38) チャクマ族はチッタゴン丘陵地帯に住む少数民族で、一説によるとミャンマーがその故郷だという [安田 2019]。ただし言語的に見ると、チャクマ語はベンガル語に近いが独立した一言語である [Osada & Onishi 2010: 44]。マニプリ語は Meithei 語とも呼ばれ、チベット・ビルマ語族に属する [Osada & Onishi 2010: 110f]

語がシレティ・ナーガリーという独自の文字によって表記された中世から近世にかけての文学伝統を持つからであり、独自の文字を持つことを重視するがゆえ本書のタイトルも『シレティ・ナーガリー文字 [について] の易しい読み物』となっているのだが、いざシレティ・ナーガリー文字の重要性を訴えかける段になると、この文字を、より大きなカテゴリー「ベンガル語」に結びつけようとするのである。イギリスの Sylheti Project や Sylheti Translation And Research の、シレティ・ナーガリー文字をシレティ語とイコールの関係に置く姿勢とは明らかに異なっている。このような首尾一貫性の欠如、むしろ「アイデンティティの揺らぎ」とも言える曖昧さが、この本 [Selīm 2018] の随所に見られる。その時々文脈に応じて、より有利な立場を採用するのである。

在野の情熱的な研究家による著作物にありがちなことだが、この本 [Selīm 2018] の体裁には、現代的見地からすると、学術書としての基準から若干外れるところがある。例えば冒頭の最初の文は、次のようである。「口がきけなかった人間の口に、言葉がほとぼしり出た瞬間こそ、人類史において、比類なき喜びの瞬間であった。」こう言って、著者は、1400億年前の太陽系の出現、45億年よりも前に惑星地球において人間が住んでいたことの痕跡³⁹⁾から始まって、人類が言語を獲得するにいたる過程を解説する。17頁では、聖書やコーランに語られる、最初の人間アダム (ādam) の出現を、紀元前4026年とする。言語を持つ点で人間は獣や鳥とは区別される特別な存在であることを議論したのち、20頁では、バイブルに述べられるノアの息子セムとハムの伝説に触れ、世界で話されている諸言語がセム派・ハム派という二つの系統に分かれることを述べる。さらにセム派・ハム派の下位グループとして、言語学者たちは、インド・ヨーロッパ語族、インド・日本語族 (indo-jāpāni) (!), インド・イラン語族、アーリア語、インド・アーリア語 (indo-bhāratiya ārya bhāṣā) などの様々な言語系統 (bhāṣā paribār) の存在を認めるのだ、という。つまり、宇宙発展史、言語起源論、印欧比較言語学に関する誤謬に満ちた知識にコーランやバイブルの情報を散りばめて、導入部が書かれている。この導入部分は、当然のことながら、学術的な情報を得るためにはあまり有用であるとは言えないけれども、著者の価値観や本書を執筆する際の動機が知られて興味深い。言語を論じるのに宇宙論や神学が引かれるのは、それはムスリムの著者 Selīm の属するベンガルの宗教文化において、伝統的に言語と宇宙創成が深い関わりをもって語られてきたからであろう。現代の学術書・啓蒙書の体裁を取っていながら、この冒頭部分の発想は、中世のスーフィー的文献における宇宙創造論から、さほどかけ離れていない⁴⁰⁾。

19頁では「言語は、民族意識 (jātiyātā-bodh) の形成において最も大きな役割を持つ。同じ言

39) 明らかに著者は、45億年前の惑星地球の出現を人類の出現と混同している。

40) 本書の後半の内容は、シレティ語あるいはシレティ・ナーガリーを用いて執筆を行った中世から現代にいたるまでの詩人たちを紹介するが、詩人の出自と生涯に関する短い解説、作品名の列挙とごく簡潔な内容紹介に終始しており、現代的な文学史というよりは、むしろムスリム文学の伝統的なタズキラ tadhkīrah (詩人列伝) のジャンルに近い体裁を取っている。

語で話をすれば、相手が自分に属するという意識（*nijasbatā-bodh*）が相互に生まれ、同族であることの絆（*ātmikatār bandhan*）が体験される。民族意識形成において、これは一つの万能薬である」と述べる。言語以外にも、民族意識を形成する要因となるものがありうる、と認めつつも、著者は、言語の果たす意義が極めて重要だと考えているようだ。著者の考えでは、シレティ語話者のアイデンティティの中心的な核となるのは言語であって、具体的にはシレティ語が標準ベンガル語とは語彙・文法の点で著しく異なっており、それに加えて、シレティ語を書き表すための独自の文字が存在することが、アイデンティティ形成の拠り所となっている、ということであろう。もちろん、後ほど触れる通り、シレティ語の中世文献のほとんどが、スーフィー的性格の強い宗教文献だったことから、言語に根拠を置くアイデンティティは多分に宗教性・思想性を付与されている。

ただし、イギリスのシレティ系移民とは違い、著者 Selīm はシレティ語をベンガル語の下位言語（*upabhāṣā*）あるいは地方言語（*āñcalik bhāṣā*）と呼ぶ。つまり、あくまでベンガル語の一方言と位置付ける。シレティ語がいくら標準ベンガル語からかけ離れており、その事実によって独自の所属意識が形成されている、と言っても、度を超すと他地域のバングラデシュ人の共感を得にくくなり、また、万が一バングラデシュ国からの分離を提唱しているというような誤解をされたりすると困るわけで、それを回避するための意図が所々で垣間見える。シレティ語話者としてのアイデンティティとバングラデシュ人というアイデンティティ、さらにベンガル人としてのアイデンティティが重なり合っており、それらの間で適宜バランスを取っている姿が見て取れる。

上で触れた通り、言語は民族意識の拠り所だ、という [Selīm 2018: 19]。それに続く 20 頁では、著者はバングラデシュ独立戦争に言及して次のように述べる。

「ガンジス川デルタに位置するバングラデシュは、何世紀にもわたり異民族によって支配されてきた。最後に英国植民地支配の後、パキスタンの新たな植民地主義支配の時代に、ベンガル文化を根絶やしにしようという邪悪な試みとして、[ベンガルの] 文化的意識に対して圧迫が加えられた。我々の母の言語（*māyer bhāṣā*）を奪おうという試みも行われた。ベンガル人は、胸を張って闘い、血を流して、母の言葉に対する暴虐を打ち負かしたのだ。異国の支配者により虐げられ蔑まれ踏みにじられたこの言語こそ、ベンガル民族（*bānālī jāti*）の文化および民族的権利の象徴である。」

今日のバングラデシュとなっている地域は、1947年インド・パキスタン分離独立の際に、「東パキスタン」としてパキスタンに組み込まれた形で独立した。しかしパキスタンの政治・経済の拠点は西パキスタン側にあり、東パキスタンは西に従属する位置に置かれた。このような従属の状態は、東パキスタンの住民にとっては、英国の植民地支配とさほど変わらないものと感じられ、不満が高まった。これが民主化運動を経て 1971 年に東パキスタンがバングラデシュとして独立する結果につながるのだが、興味深いことに、民主化運動の焦点は、言語をめぐる運

動であった。つまり、国語としてウルドゥー語を強要してこようとする西パキスタン側に対して、東側の住民の大半を占めるベンガル人が、ベンガル語国語化運動を展開した〔辛島・前田・江島 2012: 941〕。「母語のために血を流した」という表現は、今日でも、バングラデシュの独立について語られる際にいつも用いられる常套句である⁴¹⁾。

著者は、本題であるシレティ語およびシレティ・ナーガリー文字に入る前に、まずベンガル語について数ページを費やして解説する〔Selīm 2018: 23-27〕。それは、シレティ語話者という所属意識よりも上位に、まずベンガル人あるいはバングラデシュ人としてのくくりが存在し、それを著者自身も受け入れていることを示す。曰く、ベンガル語はインド東部で話されていたガウディーヤ・アパブランシャ語 Gauḍīya Apabhraṃśa⁴²⁾から派生した言語で（23頁）、ベンガル文字はすでに10世紀に出現していた（26頁）。ベンガル語は、3億人もの話者人口を誇り、それは世界第7位である（26頁）。つまり、この一連では、ベンガル語が長い歴史を持ち、世界的大言語のひとつである、と誇らしげに語る。

27頁では、ベンガル語の地理的な広がり（すなわちバングラデシュ、インド西ベンガル州、インド・トリプラ州、インド・アッサム州内のボラク Barāk 盆地など）について短く触れたのち、著者は唐突に、1961年5月19日にインド・アッサム州シルチオル Śil'car で起きた、ベンガル語運動に関する一つの事件に言及する。これは、当時、アッサム州の公用語をアッサム語に限定して制定しようというアッサム州政府の法案（āsām bhāṣā bil）に対抗して、アッサム州内に住むベンガル語話者がベンガル語にも公用語としての地位を認めさせようとして興した運動の最中に起こった出来事を指す。シルチオル鉄道駅に入ろうとした運動家たちに向かって警察が発砲し、11人が命を落とし、50人以上が負傷したという。本書の記述によれば、この運動の結果、アッサム州ではアッサム語と並んで、ベンガル語を公用語（sar'kāri bhāṣā）の一つとして認めることになった。ボラク盆地を始めとして、アッサム州には様々な県（jela）に70万から80万人のベンガル語話者が住んでいる、という。〔Selīm 2018: 27〕

つまり、著者はベンガル語話者が居住する地域を列挙していく流れで、アッサム州に言及したついでに、ふと思い出したかのように、ベンガル語を守ろうという言語運動に情熱的に言及する。そして、これに続く次の段落では、すぐまたベンガル語話者の住む地域として、オリッサ州やチャッティースガル州、さらに SAARC 諸国ならびに英国をリストアップしていく。

しかし、飛んで31頁、今度はシレティ語とシレティ・ナーガリー文字の説明に入りながら、著者は誇らしげに言う「インド亜大陸（bhāratiya upamahādeś）の東部シュリーハッタ Śrīhaṭṭa⁴³⁾

41) インド側のベンガル人にとり、1947年のインド独立は極めて重要な歴史的出来事であるが、バングラデシュのベンガル人にとっては、こういった経緯があるので、1947年の出来事は相対的に重要性が軽くなる。そのことが、両者の間に、自覚がなくとも微妙な意識の差を生じている場合がある。筆者のバングラデシュ人インフォーマントの言い方では「バングラデシュ人は、1947年の時点では、大して得をしなかった」のである。

42) Gauda 地方すなわちインド東部で話されていたとされる中期インド・アーリア語の晩期の形。

43) 真偽の程は定かではないが、シレット Silet という地名は、この地に栄えた古の都の名 Śrīhaṭṭa が語形変化をしたものであるとする説が一般的に流布しており、著者 Selīm もそれを採る。

すなわちシレトは、偉大なベンガル文化 (br̥hattar baṅga-saṅskṛti) の中に含まれるけれども、この地方の文化的独自性 (nijasbatā) の発露が、彼ら (=この地方) のシレティ・ナーガリー文字において、ある。」さらに、シレティ・ナーガリー文字についての「考察 (carcā) は⁴⁴⁾ シレトを中心としてはいるものの、その広がり、今日のインド [共和国] のアッサム州の Śil'car, Hailākāndi, Badar'pur, Karim'gañj 地方に及んでいる。トリプラ州の一部にも、その流布がある。バングラデシュにおいても、シレトを取り巻く四方に広がった。」[Selīm 2018: 31]

このように、シレトを拠点とする独自の文字文化の偉大さについて雄弁に語りつつも、筆者はここで再び、シレティ語は、あくまでベンガル語の方言であると付け加え強調しておくのを忘れない。「シレティ方言 (upabhāṣā) は、ベンガル語の一つの種類あるいはパターンに他ならない。」「シレティ語もまた、ベンガル語の一つの地方的な姿 (āñcalik rūp) なのだ。」[Selīm 2018: 31]

さて、先に、著者 Selīm は27頁で、突如、脈絡なく、1961年5月19日にアッサム州シル Chol Śil'car で11人の犠牲者を出したベンガル語公用語化運動に言及していた。わざわざ文脈から脱線してまでこの事件に触れる必要がある、と著者が考えた理由は、どうやら次のようなことらしい。シル Chol は、シレティ語話者人口の多い土地の一つであるから、ここで話されている「ベンガル語」とは、つまり実際はシレティ語だろうと推測される。Selīm がここで暗に言わんとすることは、ベンガル人が血を流して母語を守ったこの運動は、シレティ人によって、すなわちベンガル語の一方言シレティ語を話す人々によって担われた、ということなのだろう。つまり、Selīm は、ベンガル語・ベンガル人という、より大きなグループの一員としてシレティ語話者が果たした役割に読者の注意を喚起することによって、シレティ語とその言語文化の重要性を訴えかける、という戦法をここでは取っているのである。

ただし、1961年頃のアッサム語法案に対抗するベンガル語話者による反対運動の一連の流れについて、別の著者の研究 [Biśbās 2017] を読むと、その論調は、Selīm のものとは著しく異なっている。Selīm はバングラデシュ国シレトに住むムスリムであるのに対し、この著者 Biśbās はインド共和国に住むヒンドゥーのベンガル人である。「アッサム州においてベンガル語を守ろうと運動したのはヒンドゥー教徒が主だった、これに対し、ムスリムは常にこれを阻止妨害しようとした」というのが、運動の紆余曲折に富んで複雑な経緯を、一次資料を綿密詳細に分析しながら辿るこの研究の、随所に述べられる Biśbās の見解である⁴⁵⁾。実際、Selīm [2018: 27] は、1961年5月17日シル Chol 発砲事件の犠牲者11人の名前を、運動の勇士として挙げているものの、それらは名前から判断する限り、全員ヒンドゥーである⁴⁶⁾。面白いことに、Biśbās もまた、

44) 「文化は」とも訳せる。

45) ちなみにシレト管区 (Sylhet Division) は、英領インド時代にはアッサム州に属していたが、1947年分離独立時に、住民投票により、東ベンガル (すなわち東パキスタンつまり後のバングラデシュ) の一部となった。

46) Kamalā Bhaṭṭācārya, Kānāi Niyogī, Kumud Dās, Caṇḍīcaran Sūtradhar, Taraṇī Debnāth, Birendra Sūtradhar, Śaciṇdra Pāl, Satyendra Deb, Sukomal Purakāyastha, Sunīl Sar'kār, Hiteś Biśbās.

ベンガル語運動を語る際の紋切り型表現「血を流して母語を守る」という表現を多用するが、このように Biśbās と Selīm では、明らかに見方が食い違っている。そこには、両者の立場の違いが無意識のうちに投影されてしまっているように感じられる。またさらに、第三者のアッサム語話者の立場から見ると、まったく異なるストーリーになるだろうことは疑いない⁴⁷⁾。とはいえ、アッサム州におけるベンガル語の在り方をめぐる言語運動は私の専門と能力を超える大きな問題であり、本稿のテーマからも逸れるから、この辺りで止めておこう。

シレティ語の特徴の一つとして、著者 Selīm は、アラビア・ペルシア語彙の多さを挙げる。その理由として、14世紀に小アジア・コンヤ出身⁴⁸⁾の聖者シャー・ジャラルール Šāh Jalāl がシレットにやって来たことを挙げる⁴⁹⁾。聖者に付き従って、異国から多くの者がこの地に移住し、現地民と混血することにより、外来語彙が増え、また言語の音韻そのものも影響を受けた、とする⁵⁰⁾ [Selīm 2018: 32]。

シレティ語に対する語彙・音韻的影響はともかくとして、シレットがイスラームの布教、特にスーフィー神秘主義の布教活動の拠点となり、この地域に特有の宗教的アイデンティティが輪郭を取ってきたということには疑いが無い。またそれを補強するものとしてシレティ・ナーガリーという独自の文字が役に立った。シレティ・ナーガリー文字で記された文献の多くは宗教的な歌詞集や物語詩、さらに信仰に関する入門書などで、庶民を対象とした布教に関するものであった。この本 [Selīm 2018] の後半はこの文字で書かれたシレティ語の諸文献の目録的なものであり、本稿では、煩雑になるので個別の具体的な情報には踏み込まないでおくことにする。

シレティ・ナーガリー文字促進団体 Sylheti Translation And Research のサイトによると⁵¹⁾、今日知られている最古のシレティ・ナーガリー文字写本は Gulam Huson 著 Talib Huson であるが、そこに記載される「1181年」をどの暦として解釈するかによって、西暦 1774 年か 1559 年のどちらかになるという。また、写本で用いられている言語は 1500 年頃のベンガル語に近いので、より早い年号が確からしい、という⁵²⁾。

47) アッサム語は独自の古い文学伝統を持つものの、ベンガル語とともにインド・アーリア語東部言語群に属するためベンガル語とは近い関係にあり、ベンガル文字（に多少工夫をしたもの）で表記されるから、近代語としていち早く整備されたベンガル語に比べて劣勢に立たされたであろうことは想像に難くない。これに、政府の思惑が絡んで事態が錯綜した、ということだろう。

48) 一説による。

49) シャー・ジャラルールのシレット征服は、1303 年 [Plettner 2007: 1]。

50) ただし、これがシレット特有の状況だったかどうかについては精査が必要であろう。ベンガル語が標準化されるまでは、地方やコミュニティによって様々な形のベンガル語があった、と私は考えるからである。シレットに限らず、ムスリム移民のコミュニティはアラビア語・ペルシア語彙を多用する傾向があったのではないか。

音韻が移民の母語の影響を受けて変化した、という説は、受け入れがたい。たしかにシレティ語では、閉鎖音 k, c, p が摩擦音化して x, s, f と発音される強い傾向があり、その結果、摩擦音を豊かに含むアラビア・ペルシア語彙が原語の発音に比較的忠実に発音される。しかし、方言の音韻体系全体に及ぶこの変化を移民に帰すのは短絡である。

51) <http://www.sylheti.org.uk/siloti-nagri> (閲覧 2020/09/15)

52) つまり、この言語はベンガル語の古形で、おそらくシレティ語の前身となったものだ、ということ。ただし、これは、シレティ・ナーガリー文字の促進団体の言い分だということに留意しておく必要がある。語形の違いは、その言語の古さ（つまり現在からの時間的隔たり）ではなく、（中央の標準的言語からの）地理的隔たりによるものかもしれない、それほど古いものではない方言的な異形を、形が特異だからと言ってアルカイックな語形であると見誤っている可能性もある。

34頁では、シレティ・ナーガリー文字考案の理由として、著者 Selīm は次のように説明する。ベンガル文字表記はサンスクリットの難解な綴りを踏襲しており、話し言葉の発音とは大きく離れている⁵³⁾。サンスクリット語の元の綴りを保持することは、語源的な解釈と理解の助けとはなるだろうが、文字から実際の発音を推測することは困難である。また実際の日常会話では、新时期インド・アーリア語（この場合はベンガル語やシレティ語）の単純化された音韻構造を持つ日常的な語彙が用いられ、サンスクリット語彙の使用は限られている。そこで、問題を解決するために、シレティ・ナーガリー文字では、言語の実際の発音をそのまま表記する方式を採用した。サンスクリットには長母音・短母音の区別が存在していたが現代語は失われたので、母音の文字も一種類に統一された [Selīm 2018: 34]。その結果、ベンガル文字の51字に対して、シレティ・ナーガリーの文字数は33文字（5つの母音字+28子音字）に抑えられた [Plettner 2007: 1]。新しい文字の考案は、この地におけるムスリム・コミュニティの独自性を象徴するものでもあった [Selīm 2018: 34]⁵⁴⁾。

こうして考案されたシレティ・ナーガリー文字は、ベンガル文字よりも遥かに簡便だったため、シレト地方のムスリム庶民のあいだに急速に広まった [Selīm 2018: 35]。しかし興味深いことに、この文字を教える教育機関は存在せず、また政治的な場でも使用されず、統治者による庇護促進もなされなかった、という [Selīm 2018: 35]⁵⁵⁾。ムスリム庶民層の女性の間にも広まったという⁵⁶⁾。ただし、ヒンドゥー教徒はこの文字を使わなかった⁵⁷⁾。Selīm [2018: 55] では、シレティ・ナーガリーは非常に簡便な文字なので、全く文字の読み書きを知らなかった人でも、二日半のうちにこの文字を読んで発音できるようになる、とまで言う⁵⁸⁾。独習も可能で、この簡単さが、シレト地方でベンガル文字を凌いで広まった大きな利点であった、という。多くの場合、書くことよりも文字を目で見て発音することが広まった。特に師匠につかなくても、誰かこの文字を発音できる人のそばで簡単に習得することができた、という [Selīm 2018: 55]。アイデンティティの独自性を表現する際には様々な仕方がありえ、この文字は、シレトの聖者シャー・

53) サンスクリット特有の複雑な子音連続は、現代のベンガル語の発音では多くの場合、単純化される。

54) この箇所では、シレティ・ナーガリー文字は、ベンガル文字、デーヴァナーガリー文字、ビハール地方のカイティー Kaithi 文字を混ぜ合わせて作られたとする。この説は Plettner [2007: 1] にも引かれているが、憶測の域を出ない。

55) 同様に [Chalmers 1996: 9] も次のように述べる。“But what really makes Sylheti Nagari special is that it is a *popular* script, a writing system for the common people. Whether the language of the royal courts and administration was Persian, Bengali or English, Sylheti Nagari never enjoyed any official status or support. It is not the language of laws, decrees or tax documents.”

56) “[...] the ability to read Sylheti Nagari was known to be particularly widespread among women.” [Chalmers 1996: 10]

57) ただし例外はあったようで、この頁 Selīm [2018: 35] には、ヒンドゥーから改宗してムスリムになった Gaur'kiśor Sen の名が挙げられている。また Selīm [2018: 43] には改宗者 Bhabānanda の名が挙げられる。興味深いことに、同43頁には、Nabīn Dās は改宗せず、ヒンドゥー神話ラーダー・クリシュナの愛の歌をシレティ・ナーガリー文字で著した、とある。ただし、クリシュナ神と牧女ラーダーとの男女間の恋は、アッラーと使徒ムハンマドの間の神的な愛の比喩であるという。後述するが、ベンガル地方のスーフィー神秘主義は、土着信仰（ヒンドゥー教や仏教、タントラ思想など）と分かちがたく混淆しているから、こういう白黒はっきり区別のつかない例が出てくるのである。実際これらの歌が演奏されて耳で聴かれたり、誦んじて歌われたりする場合、文字表記は関係なくなる。聴き手の多くは無文字生活者だったであろうし、聴衆にはヒンドゥー・ムスリム両方が混ざっていたと思われる。

58) なぜ「二日半」なのか定かではない。シレティ・ナーガリー文字習得の容易さを言う際の紋切り型表現であろうか。

ジャラルに結び付けられ、その歴史的な由緒正しさが強調されている。その一方で、長所として、この文字が至って簡便であること、それによって、無学な人でも学べる、庶民に広く開かれていること、が提示される。つまり、起源の聖性と並んで、この文字の使用者である庶民の無名性が肯定的に評価されているのである。

さて Selīm の見解に従えば、シレティ語の文学史は、この地に花開いたムスリム文化に裏打ちされた宗教文学の歴史で、そこには深淵なるスーフィー思想が浸透している、ということになろう。しかし実際の様相は、そう一筋縄にはいかないようである。この本 [Selīm 2018] に紹介されるシレティ語著者の作品のほとんどはスーフィー的宗教歌集であるが、シレト地方に限らずベンガル地方の民衆レベルでのスーフィー信仰は、ヒンドゥー教や仏教などの土着宗教と不可分に混ざり合った混淆宗教としての性格が強いからである。本書のあちこちに、そうした背景を垣間見させる、ほころびが見つかる。今日のベンガル地方に見られる、スーフィーあるいはフォキール (phakīr, faqīr) と呼ばれる放浪修行者の修行法には、土着的なタントラ修行法の著しい影響が認められる。Selīm [2018: 68] には、スーフィー行者 Mamin Uddin (= Mu'min ud-Dīn) Daikhurā Munsī の作とされる無数の歌詞が、シレト地方の東北部および Kāchār において、一般的民衆の間に伝承され、今でも歌われているという。そしてそれは、ヒンドゥー・ムスリムの宗教の垣根を超えている、という。彼はあだ名を「気違い⁵⁹⁾ドイクラ」(pāg'lā daikhurā) と言い、その歌詞には、中世インドのタントラ修行者集団ナータ Nātha 派の影響が認められるという。

確かに、この本 [Selīm 2018] に時折引用されるシレティ語の宗教歌の語彙表現は、ベンガルのタントラ系放浪修行者バウル Bāul の修行歌に酷似している。というよりも、むしろ、シレト地方のこれらのスーフィー修行者達は、本質的にはバウルと変わらないものなのだろう⁶⁰⁾。シレトのフォキール (ムスリム乞食僧) 文献の中には、シレティ・ナーガリー文字で書かれた、ヒンドゥー教の神クリシュナについての伝説『ハリ・ヴァンシャ』(Harivaṃśa) も存在し、そこでは、ラーダー・クリシュナの恋の歌が、部分的な改変を加えられ、スーフィー神学的に解釈されている、という [Selīm 2018: 76]。当時の社会では、読み書きを生業とするごく少数の知識階級を除いては、コミュニケーションは文字を介さずもっぱら口頭で行われていたから⁶¹⁾、その状況下で、歌われ朗読されるテキストがヒンドゥーのものかムスリムのものかを区別する線は曖昧になりがちだった。

このように、大きくくりとしての「ベンガル語・ベンガル人」とシレトを中心とする地域

59) 「気違い」とは「神的エクスタシーに酔いしれる」という意味である。

60) 例えば Selīm [2018: 81] に引用されたシレティ語のスーフィー詩人 Śāh Ār'kum (1877-1941) の詩行 nārīr dehāy kī dhan ratan yadī cinilāy nā「女の身体にどんな財と宝石があるかを知らなければ」という歌詞は、明らかにバウルのタントラ修行法における儀礼的性交を前提としている。

61) 実は、文字を介しないで口頭で行われるという点では、今日の英国やヨーロッパのシレティ移民のシレティ語を用いたコミュニケーションの状況もさほど変わりがない。彼らの読み書きの言葉は英語・フランス語などであり、家庭内や親戚同士、あるいはシレティ・コミュニティの中でのシレティ語会話は文字を前提としない。

の「シレティ語」や「シレティ・ナーガリー文字」という二つの言語的アイデンティティ間の区別、あるいはヒンドゥー・ムスリムという二つの宗教的アイデンティティ間の区別は、曖昧で流動的なものとなっている。Selīm[2018]にとり、このような曖昧さは必ずしも不利とは感じられていないようだ。同書の末尾は、次のように締めくくられる。

「シレティ・ナーガリー文字は、シレトの人々だけが占有する財産ではない。ベンガル語を話す各人が、それに対する権利を持つのだ。ベンガル語・文学・文化の領域からこそ、シレティ・ナーガリー文字の広まりと増大がある。したがって、[シレティ・ナーガリー文字を] 大切だという思い (gaurab) はベンガル人のものである。とはいえ、シレトの方言 (upabhāṣā) を保持しながら、この地方の人々の愛情によって、この[文字の] 発展がある。当然、シレトの人々の[言語と文字を] 大切だと思う意識 (gaurab-bodh) はどの場所のベンガル人よりも異なり、大きい。シレティ・ナーガリー文字と文学に対するシレト人 (sileṭi)⁶² 達のこのような熱情を、分別を持った人なら誰も、誇張だとは言わないだろう。むしろ、たった一つの言語 (=ベンガル語) の影のもとで生じたこのような様々な変化発達は、我々の言語の力と偉大さに他ならない、と判断するだろう。」[Selīm 2018: 85]

以上みてきたように、バングラデシュ国内で活動する Selīm の立場は、本稿の前半で観た、英国のシレティ語活動家たちのそれからは、ニュアンスを異にしている。

文献表

シリーズ名によるもの

Loka-sāhitya. Ḍhākā: Bāṅlā Ekāḍemī, Bardhamān Hāus.

– Ṭṛtīya khaṇḍa (vol.3). 1371 (baṅgābda).

– Pañcama Khaṇḍa (vol.5). 1965.

– Traṇyodaśa khaṇḍa (vol.13). Badiujjāmān (sampādanā). 1976.

– Pañcadaśa khaṇḍa (vol.15). Ālam'gīr Jalīl/Sāmīyul Islām (sampādak). 1979.

著者名によるもの

Badiujjāmān (sampādanā) 1968: *Sileṭ gītīkā*. Pratham khaṇḍa. Ḍhākā: Bāṅlā Ekāḍemī.

Biśbās, Sukumār 2017: *Āsāme bhāṣā āndolan o bāñālī-prasaṅga 1947–1961*. Kal'kāṭā: Pārul Prakāśanī.

62) 本稿では、厳密さを期して sileṭi を「シレティ語話者」と訳してきたが、この箇所では、文脈に従って「シレト地域に住む人々」と解釈して「シレト人」と訳す。

- Chalmers, Rod *1996⁶³⁾: *Learning Sylheti*. Centre for Bangladeshi Studies⁶⁴⁾.
- Datta, Gurusadaṅ/Bhaumik, Nirmalendu (sompādita) 1966: *Śrīhaṭṭer lokasaṅgīt*. Kalikātā Biśbavidyālay.
- Descamps, Philippe/Monthéard, Xavier 2020: “Le laboratoire luxembourgeois. Comment s’invente une langue.” *Le Monde Diplomatique*. No. 790–67e année. Janvier 2020.
- Gope, Amallesh/Mahanta, Shakuntala 2014: “Lexical Tones in Sylheti.” 4th International Symposium on Tonal Aspects of Languages (TAL-2014), Nijmegen, The Netherlands. May 13–16, 2014. ISCA Archive (https://www.isca-speech.org/archive/tal_2014/tl14_010.html). 閲覧2020/09/14
- Lloyd-Williams, James/Chowdhury, Matiar Rahman (tr.) 2006: *Ten Sylheti Poems. Dos'tā Siloṭi Kobita. Daś'tā Chilaṭi Kabitā*. London: Sylheti Translation And Research.
- Osada, Toshiki & Onishi, Masayuki (ed.) 2010: *Language Atlas of South Asia*. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.
- Plettner, Steven B. 2007: *Syloti Grammar. A description of the grammar of the Syloti language spoken in northeast Bangladesh*. Presented by: Destiny Language Center, Sylhet. Published by: AMC Publishers, Dhaka⁶⁵⁾. Second printing.
- Selīm, Mostaphā (Salim, Mustapha) 2018: *Sileṭi nāg'rīlipir sahaṅpāth*. Sileṭ: Śrīhaṭṭa Prakāś. (*Sylheti Nagrilipir Sohojpath*. Sylhet: Sreehatta Prokash.)
- 小川敦 2019 「ルクセンブルク語促進政策と公用語——小規模自治体広報誌の使用言語から——」, 『ヨーロッパ超域研究1』言語社会共同研究プロジェクト, 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻, 69–81。
- 辛島昇, 前田専学, 江島恵教ほか(監修) 2012: 『[新版] 南アジアを知る辞典』平凡社。
- 安田千恵子 2019: 「焼畑と独自の文化に生きる チャクマの人々」, 『バングラデシュを知るための66章』明石書店, 365–370。

63) 出版年の記載がない。アマゾンで検索をかけたところ、1996年と表示されていたため、便宜的にこれを出版年として採用した。ただし Glottolog 4.3では1995年とされている。

64) 出版社の記載なし。注文先として、Linda Wilson at the Research Administration Unit, School of Business & Social Sciences, Roehampton Universityと記載され、また、Eastside Books, 166 Brick Lane, Londonでも入手可能、とある。おそらく大学の研究室単位で発行された学習資料のようなものなのであろう。

65) 通常の出版社の記載法とは異なるため、原書の方式に従った。